

2024年9月5日
早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター

早稲田大学ふくしま浜通り未来創造リサーチセンター・1F 廃炉の先研究会
ふたば未来学園中学校・高等学校

第10回1F 地域塾
議事録

開催日時：2024年6月15日（土）13:00-18:00

会場：福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校・会場＋オンライン（Zoom）

参加者数：62名（会場44名、オンライン18名）

総合司会：小磯匡大（1F 地域塾・副塾頭、ふたば未来学園高等学校・教諭）

プログラム

13:00-13:10 開催にあたって

13:10-13:40：話題提供

（1）事故遺構を考える

高橋洋充（福島東高校・教諭、浪江町）

（2）1F 廃炉を考える

溝上伸也（東京電力・廃炉推進カンパニー・燃料デブリ取り出しプログラム部・部長）

13:40-14:50：座談会

司 会：小磯匡大（1F 地域塾・副塾頭、ふたば未来学園・教諭、檜葉町）

齋藤琴音（ふたば未来学園・高校2年）

須藤翔磨（ふたば未来学園・高校2年）

菅波香織（1F 地域塾・運営委員、弁護士、未来会議事務局長、いわき市）

正岡秀章（原子力規制委員会・原子力規制庁・東京電力福島第一原子力電
所事故対策室・企画調査官（審査担当）・上席安全審査官）

井上 正（電力中央研究所・名誉研究アドバイザー）

高橋洋充（福島東高校・教諭、浪江町）

溝上伸也（東京電力・廃炉推進カンパニー・燃料デブリ取り出しプログラ
ム部・部長）

14:50-15:00：休憩

15:00-16:20：少人数グループによる「対話の場」（会場参加者のみ）

16:20-16:30：休憩

16:30-17:50：全体会

司 会：森口祐一（1F 地域塾・副塾頭、国立環境研究所・理事）

崎田裕子（1F 地域塾・副塾頭、環境ジャーナリスト）

17:50-18:00：閉会挨拶

松岡俊二（1F 地域塾・塾頭、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授）

1. 開催にあたって

松岡俊二（塾頭）：添付 PPT 資料参照

2. 座談会と討論

斎藤: 震災の記憶はあまりないけれど、「震災記憶消滅世代」に入ることについて、あまり深く考えていない自分がそこに入るのかと驚いている。自分より少し上の世代が、震災や事故の記憶を持つ最後の世代だと思う。

須藤: 僕も震災当時の記憶はなく、15 歳、18 歳の世代が「震災記憶消滅世代」と定義されたことについて、しょうがないかなと思っている。質問は、勝手に決めつけられるのが嫌なのかと聞かれている気がするが、僕は実際のところ仕方ないかなと思っている。

井上: 溝上さんの説明にもあったように、炉心の水はかなり汚染されている。私が 1F に入った時、最初にやったことはその汚染の濃度を測り、燃料がどれくらい壊れているかを調べることだった。数年間、核燃料（燃料集合体）がなぜ壊れるのかを研究し、技術の進歩により、今では核燃料がほとんど壊れなくなった。この技術の積み重ねが非常に重要だと思う。しかし、最近の新しい燃料の開発に対して、昔の技術の継続が今の人たちに伝わっているのか心配だ。私は廃棄物の処理にも関心があり、オンサイトやオフサイトの計画について、みんなで議論して決めていくことが必要だと思っている。

正岡: 自分も 3.11 の時に原子力安全保安院にいて、津波が来た後すぐに官邸に行った。その後 3 月末までの記憶が飛び飛びで、忙しすぎて何もできなかったという状況だった。記憶があまり残っていないので、当時のことをしっかり語るのは難しい。僕らは規制側として責められる立場だが、高橋さんに言われたように、約束できることは約束し、できないことはできないとしっかり対応していかないといけないと改めて思った。

菅波: 震災のことを思い返すと、当時、子供が 4 人いて、上の子たちが小学生 3 人と 1 歳の子だった。子供たちは避難の時に学校が休みで、親と遊んだことが楽しい記憶として残っている。その後、震災について話を聞く機会があり、積極的にそういう場に出る子もいた。下の子は震災の時はお腹にいて、最近、震災について学んで、色々なことが繋がったと感じている。無理に伝えようとするよりも、それぞれのタイミングで自然に繋がっていくことが大事、小さく種まきをすることが重要かもしれないと感じた。

高橋: 教育は重要だが、お金がある人だけが学べるという現実があると思う。お金がないと学べないのは問題だ。また、人口減少も大きな問題だ。最近の福島民報によると、2023 年の福島県の出生率は 2.1%で、9,000 人しか生まれていない。私の学校には 700 人ほどいるが、全体の生徒数が減っているため、部活動も少なくなっている。さまざまな分野で優秀な人材が求められているが、廃炉などの原子力分野も重要だ。福島の事故の経験は世界に貢献するもので、この分野は優先事業だと思う。奨学金の仕組みを広げて、この分野に進む人を支援し、他の分野に進んでも貢献する意識を持ってもらうことが重要だ。

井上: 人材育成については大きな問題だと感じている。高橋さんの提案にもあったように、国や企業が公募で人材を育成しているが、もっと若い世代に原子力やエネルギーの話を

知ってもらふことが重要だと思う。今日参加している方々のように、若い世代に関心を持ってもらふことが必要だ。そのためには、国や県などの行政がしっかりとサポートすることが欠けていると強く感じる。

菅波:今日の溝上さんの物理系の話が、若い人や技術系ではない人にも面白いと思われたかどうかを聞いてみたかった。私自身は、元々、理系で物理を学んでいたもので、とても面白かった。物理が生活に役立つとは考えていなかったが、今日話を聞いてワクワクした。使命や責任とは別の切り口で、純粋に面白いと感じるきっかけを作ることが大事だと思う。

須藤:僕のお父さんも原子力の仕事をしていたので、小さい頃から原子力やエネルギーについて学んでいた。そのおかげで今回の話も理解できた。数学が好きで、理解できるから面白いと思う一方で、国語が苦手な相手の心情を読み取るのが難しい。理解できないと興味を持たないと思うので、原子力のように難しい分野はわかりやすく説明することが重要だと感じる。若い世代が理解しやすくすれば、もっと多くの人が原子力に関わるようになると思う。

長谷川:原子力や化学などの分野は目に見えないため、理解するのが難しいと感じることがある。最近、高校生になって勉強が難しくなり、気づいたのは、日本語は小さい頃から慣れ親しんでいるため、感覚的に文章の不自然さを感じ取れる一方で、英語も単語が難しくなると事前に覚えることが重要になるということだ。簡単な英語の文章なら直感的に理解できる。科学や数学も同様で、小さい頃感覚が大事だと思う。小学生のうちに多くのことに触れることで、直感的に理解できることが増えれば、今後の教育で原子力などのより難しい分野への入り口が開かれると思う。

正岡:震災後に原子力学科を増やす取り組みをしたことがあるが、学科ができて、学生にとっての面白さがなければ進む気持ちは湧かないと思う。理系の分野では、面白さが必須だ。僕も元々は原子核物理が専門だったが、偶然の経緯でエネルギー分野に関わることになり、面白さを感じながら進んでいった。廃炉や専門分野にこだわるのではなく、基本的な物理の原則を理解し、広い視野を持つことが重要だ。興味を持ちつつ、知識を深めることが大切だと思う。

井上:僕が大学に入った昭和 42 年には、原子力発電はオリンピックの電力として使われ始めたばかりだったので、原子力は夢だと思っていた。しかし現実の問題が目の前に現れてくると、特に廃棄物の処理問題が見えてくると、その人気は衰えていった。そして、廃炉という問題が起きると、ますます拍車がかかる。原子力だけでなく、どの分野でも夢を持つことが重要だ。廃炉にも新しい技術開発などの夢を持たせ、若い人たちが興味を持てるようにすることが大切だと思う。

高橋:提案の中で事故遺構に「約束」を組み込んでいる。この「約束」というのは、例えば、30 年後に廃棄物を県外に移すという法的な約束のようなものだ。または浪江町のように、原発建設に関して町の人々と交わした約束もある。地域の人々との約束が物事を進める原動力になると考えています。これらの約束は、軽いものでなく、責任を持ち、代々守られるべきものだと思う。

溝上: 事故炉の廃炉について、これまで手がつけられたのはアメリカの TMI（スリーマイル島）事故だけで、これは原子炉自体は壊れなかったケースである。それに対して、福島第一原発（1F）は原子炉が壊れているため、廃炉の難易度が高い。

事故分析の現場では機械工学のバックグラウンドを持つ人が多いが、若い技術者は新しい技術に精通しており、それを現場で活用することが重要だ。例えば、大学生がよく使うドローンは、事故現場の調査において非常に役立つ。ドローンを使うことで、危険な場所に直接入らずに映像を撮影し、その映像を基に 3D CAD モデルを作成することができる。また、AI の活用など、まだあまり進んでいないが、誰もやったことがないようなチャレンジングな場所なので、アイデアがあれば自分の能力を活かせる場所だと思う。

斎藤: 廃炉の問題を考える際、文系の視点も重要だと思っている。デブリの取り出しだけでなく、人々の気持ちや社会的な側面も考慮する必要があると感じる。こういう場で物理や数学の難しい話が多いと、文系の人が興味を持ちにくいかもしれない。文系にも、より多くの人が関われるようにすることが大切だと思う。

松岡: 今までの原子力村が文系だとか市民社会とうまく連携できなかったことが事故を起こした一つの原因だ。科学コミュニケーションやリスクコミュニケーションは、理系だけでなく文系の専門家も含めることで効果的に行える。

菅波: 斎藤さんが言及した問題意識は非常に重要だと思って、高橋先生が約束の履行に注目したように、科学の知見を基に合意形成や約束の履行を確実にする役割が国民一人一人に求められている。理系の専門分野において、専門家たちが積極的に取り組むべき一方で、文系の視点からも、そうした役割の重要性を理解し、関わっていくことが大切だと思う。

井上: 福島にいる人々はまだ事故の記憶を持っている方が多いが、東京やそれ以西ではその記憶が薄れてきている。除去土壌の再生利用や最終処分など、福島だけでなく広い規模で考える必要があり、様々な階層での努力が求められる。

松岡: 広島原爆ドームは 80 年の歴史があり、毎年 8 月 6 日の平和記念式典に多くの人々が集まり、被曝の記憶の継承に取り組んでいる。福島の記憶についても、広島と同様に社会全体で継承を考える必要がある。福島の問題を福島の地域だけでなく、全国的に考えるべきだ。特に、福島の 3.11 追悼式典と広島 8.6 平和記念式典の落差は大きく、記憶の継承に関する社会的意識が低いことが問題だ。

高橋: 15 歳から 18 歳の「記憶消滅世代」というのは、福島だけでなく、東京圏など他の地域にも当てはまる。例えば、福島から電力を供給していたことや、その記憶が消えつつあることも含まれる。

日本史の授業で、大正時代に猪苗代から東京への送電が成功したことが教えられるが、その後、福島の人たちは首都圏に電力を送り続けてきた。しかし、その重要な歴史や記憶が伝わっていないのだ。広島についてもいろいろと理解し、強く感じることもある。そういった思いを持ちながら、理解を深めることが重要だと思う。

3. 全体会:6グループの対話の報告と議論

グループ1:まず、記憶の保存について議論し、何を残すべきかを巡って活発な意見交換が行われた。福島第一原子力発電所事故だけでなく、その背後にあるエネルギー問題や3.11全体を包括的に記憶する必要があるという意見が出た。

次に、教育の現場では福島の事故を取り入れるべきだとの意見があったが、一方で教育には限界があり、全国共通の学びが重要だという指摘もあった。福島だけでなく、社会全体の教育に取り入れるべきだ。

また、理系と文系のラベリングについて、グループではラベリングを不要とし、多様なバックグラウンドを持つ人々が協力することが重要だと結論付けた。

さらに、事故から何を残すかについて、福島第一原発事故だけに限定せず、より広い震災全体の視点で考えるべきだという意見があった。事故の記憶を残す目的よりも、それを通じて何を学ぶかが大事、事故を通じて学んだことを次世代に伝えることが重要だ。

グループ2 a:「記憶の消滅」といえば、人間の記憶は時間とともに薄れていくが、この用語には「忘れてはいけない」という意志が込められている。最初にこの用語を聞いたときはショックを受けたが、意味を考えると納得できる部分もあった。特に、阪神淡路大震災後の世代が「震災記憶消滅世代」と呼ばれていなかったことと比較して、東日本大震災に対する意識の違いを考えさせられた。

文系と理系の役割について、グループで理系の方が多く中で、文系としてみていたが、理系と文系を分ける必要はないという意見が強かった。理系からは、処理水放出のような問題で論理的に説明しても感情的な不安が残ることが指摘された。この問題を解決するには、文系と理系の協力が重要だ。

最後に、1Fの事故遺構よりも、大熊や双葉のような未だに再開されていない町の風景が訪問者に強い印象を与えるという意見が多かった。そのため、事故遺構の保存よりも、町の風景を残すべきだとの意見が強かった。

グループ2 b:今日是对話を通じて多くの人と意見を交わし、話題自体は重いものだったけれど、いろんな視点があることを実感した。立場が異なっても、それぞれが互いの弱点を補い、強みを活かし合うことで、状況をより良くしていけると感じる。完全な平和を目指すのは難しいかもしれないけれど、互いを認め合い支え合うことで、1Fの問題も良い方向に向かうのではないかと思う。

質問: 阪神淡路大震災に「消滅世代」という表現が使われていないのは興味深い。「津波記憶消滅世代」という言葉もまだ聞かないし、原発に関して「東京で電気が使われていたことを知らない」という複雑な背景があるにもかかわらず、記憶が消滅しつつある現状は確かに問題だと感じた。

グループ3:なぜ「記憶消滅世代」という名前を付けたのかを考えた。この名前が他の世代にどう受け取られるのかも話題になった。また、3.11の記憶を負の教訓にしたくないという意見も出て、東電の人が言った「これで十分安全だと思わないこと」という教訓が印象的だった。安全だと決めつけると、それ以上を考えなくなるという指摘があった。この話を聞いて、友達が言っていた「安全だと言われて、それを信じた私たちも悪かった」という言葉を思い出した。

事故遺構については、広島の実験ドームのように象徴的なものを残すなら、原子炉が

最適ではないかという意見があった。廃炉作業が何十年、100 年続くなら、その作業自体が事故遺構になるとも言われた。また、デブリを埋め立てる場所に石碑を立てるとしたら、何語で書くべきかという議論もあり、日本語、英語、絵文字など未来に伝わる手段を考えた。この視点が新鮮で面白いと感じた。

最後に、どのくらい未来を見据えて言語を選ぶべきかという話があった。日本は人口減少社会で、2200 年や 2300 年にどうなっているのかという話も出た。その中で、「その言葉、日本語でいいのか？」という疑問が生じた。理由は単に「日本人がいなくなるから」ではなく、未来の人々に日本語が伝わるかどうかという点だった。英語が良いのか、それとも絵文字の方が未来に伝わりやすいのか、という議論になった。

グループ4:まず、「理系って偉いって言われがちだね」という話から始まり、理系が力を持っているとされる一方で、他の班の意見と同様に、お互いに専門性を持ちながらも、聞き合い、言い合える環境が理想だという結論に至った。また、中学から高校に上がる段階で、文系か理系かを選ぶのはおかしいのではないかという話にもなった。

「記憶の消滅」について、高校生たちは既に震災の記憶がなく、「消滅」という概念がどう受け取られるのか考えた。私たち 20 代前半の世代が最後の記憶を持つ世代とされている中で、既に記憶が消えつつあるのではないかという意見も出た。

さらに、宮城県の津波や福島原発事故から得た教訓は、それぞれ重要であり、震災後に何を失ったかを考えるきっかけが必要だと感じた。中間貯蔵については、双葉町の土地を活用して、原発事故による被害の姿を後世に残すことが良いのではないかという意見が出た。また、中間貯蔵の土地から 1F を眺められる展望台があったら良いのではないかという提案もあった。

最後に、1F の原発事故によって原子力がマイナスイメージを持たれているが、環境問題を考える上で原子力の未来についてもっと議論する必要があるという結論になった。これは福島県民だけの問題ではなく、未来のエネルギー問題として重要だと感じた。

グループ5:まず「記憶の消滅」について事故に関する伝承の質と量が重要だという意見が出た。特に、東京電力が 3.11 の日に何をしていたかを知ることが大切で、この日は内省や安全意識の日にするべきだ。また、歴史の授業や学校での取り入れも重要で、地域ごとに認識や意識する機会を増やすべきだとされた。頻度がなければ忘れられてしまうからだ。

次に、原発事故の周年行事について、特定の地域で行われるイベントが、その地域の人々にどのようなメッセージを伝えるかが重要であり、内容がしっかりしていないと伝わらないと感じた。

そして、文系と理系を問わず、技術の歴史や地域の歴史を学ぶことが重要だとされた。文系・理系の区別がディスコミュニケーションの原因となっているという意見も出た。専門家と地域住民の間のコミュニケーション不足が、この線引きが原因ではないかという指摘があった。

事故遺構として何を残すべきかについても話し合った。残すべきだという意見と、あまり意味がないという意見があった。広島原発爆ドームや福知山線の鉄道事故、JAL の飛行機事故などの事例を用いて議論し、遺族への対応や負のメッセージを持つ遺構としての意義について考えた。

文理や世代間、被害の違いなどの分断は考えるべきことだ。例えば、津波の被害を受けた人と地震の被害を受けた人、放射線の被害を受けた人の間での違いなど、これらの分断や線引きが問題であり、解決していく必要があると感じた。

司会: この場では立場を超えて、違う立場の人と話せたという実感がある。逆に言うと、普通の例えば高校生活とか大学の生活だと、なかなかそういう場面ってないのかと思う。

グループ5: 私の経験では、自分からそういう場所に行かないと、特に大学では留学生と話さないとバックグラウンドが違う人と関わることは難しい。

司会: 第4グループで報告してくれた卒業生も、大学でそういう話ができるかと聞いたところ、なかなか続かないと話していた。

グループ6: まず、私たちの班は事故後の対応について話し合った。東電の方からは事故後の対応には配慮が必要だという意見が出たが、他のメンバーからは事故後の対応をどう残すかについて意見が分かれた。例えば、汚染の少ない4号機を残すべきだという意見があった。東電の方とNHKの方の議論は非常に興味深かった。特に4号機の使用済み核燃料プールの水位の挙動についての質量保存とエネルギー保存の説明が印象的だった。メディアが報道する内容と実際の状況の違い、その影響力と責任について学んだ。

次に、原子力事故の捉え方について、社会では水素爆発が問題視されがちだが、実際には放射線による汚染が大きな問題であることがわかった。4号機を残すかどうかについても議論があり、何を残すべきかよりも、残すことで何を伝えたいのかが重要だという結論に至った。

さらに、他国の事例と比較し、日本では広島や長崎の原爆ドームが原子力の遺構としてメジャーだが、福島は中途半端だという意見も出た。広島や長崎は平和を訴える目的があるが、福島が何を訴えるべきかが議論された。また、東電が悪いと主張するために残すわけではないという懸念もあった。チェルノブイリの近くにあるベラルーシで研修を行った方がその時の状況について話してくれたが、福島がどのように進むべきかについても議論した。

司会: 4号機について少し前に話があったので、溝上さんの意見を聞きたいと思う。

溝上: 4号機のプールには大量の燃料が保管されており、損傷すると大惨事になる可能性があったが、水が十分にあり、水位の低下が遅れ、補充もできたため危機を回避できた。この理解は2011年から2012年には確立されており、NHKの報道も同じ理解に基づいていた。大企業でも技術的な内容を正確に伝えるのは難しい。現場の人はその難しさを感じたが、言葉にするのは困難だった。

現場の話では、4号機の水位が急激に低下しなかった理由が説明された。隣接するプールから水が流れ込んだことで対応時間が増えたが、NHKはこれを「幸運な偶然」と表現した。科学的には意図的な対応によって管理された。水位のゆっくりした低下と幸運があったが、燃料の崩壊熱がゼロにはならず、対処がなければ1ヶ月後には最悪のシナリオが現実になる可能性があった。当時、「キリン」と呼ばれるコンクリートポンプ車で水を追加した。

こうした経験から学んだことを後世に伝えることが重要だ。物理的な側面を残さなくても、得られた知識は伝えるべきだと思う。

司会: 現場での努力や対応が十分に伝わっていない現状に不本意な思いを抱いている。当事者としても、一部の記憶しか残っていないことが悔やまれる。この点を踏まえ、第6班の議論では、何を後世に残すべきかという具体的な話に進む。特に4号機については、

1号機、2号機、3号機とは状況が異なるため、全体のストーリーをしっかりと伝えないと、真の教訓として残すことはできない。

津波の被災地ではないが、避難された場所も事故の遺産として捉えるべきだという意見が出た。これを含めて、議論を進めたい。

高橋:今は高校教員としての立場が強く感じられるが、生徒たちとこの場を共有できたことを幸せに思う。自分の意図がうまく伝わらず、トラブルに思われたかもしれないと反省しているし、説明が足りなかったかもしれないと思っている。それでも、皆が私の提案を真剣に考えてくれて、変化を感じ取ってもらえたことに感謝している。他の参加者もさまざまな世代や専門家の話を聞き、もっと考え続ける必要があると感じたようで、この場を設けた意味があったと感じている。

溝上:若い人たちの意見を聞ける場として、この場は非常に貴重だと感じている。今回の議論でも、事故遺構に関して焦点が定まりにくいという意見が出てきたが、事業者としてその点は、現時点では仕事として明確に定義されていないため、やりにくい部分があるのは確かだ。しかし、こうした議論を通じて、社会全体での動きが大きくなり、それが一つの方向性として定まれば良いと考えている。

井上:今日の話で一番印象に残ったのは、塾頭が言った知識の差についてだった。しかし、知識の差だけでなく、世代間の差や地域の差、福島の場合は思いや考え方の差もあることに気づいた。しかし、グループで対話することでそうしたギャップを埋めるプロセスが良かったと思う。対話を通じて、お互いの考え方が変わるかどうかは別として、相互の信頼が生まれ、今後の後片付けや復興に向けて前向きに進めるのではないかと感じた。

須藤:対話が原子力災害に関する理解を深めるのは本当に重要だと感じる。科学的・論理的には安全性が証明されても、感情的には安心できないのが現状だ。さまざまな立場の人たちが集まることで、多くのことを学ぶ良い機会になった。

斉藤:今日の文系と理系の話し合いで、多くの意見をいただき、最終的には「文系と理系で分けず、みんなで一緒に頑張るべきだ」という結論になった。相手の意見を受け入れて話し合うことが、今後の配慮を考える上で重要だと改めて感じた。だからこそ、これからは文系・理系に関係なく頑張りたい。

正岡:今日の話で感じたのは、自分も含めて、40年以上前に生まれた人間としてあまり変わっていないということだ。学生時代に広島を訪れたときも、自由時間を増やすことばかり考えていたのを思い出す。何十年経ってもその考え方が変わっていない気がする。特に行政官として、物事を進めることが仕事で、議論も大事だが、最終的には結果を出すことが重要だと思っている。多くの意見を聞きながら進めようと努力しているが、すべての意見を反映するのは現実的に難しい。今日のような場で意見交換できたのは良かった。これからもどう進めるべきかを考え続けなければならないと感じている。

平岡:元々経済産業省に長く勤め、エネルギー問題に関心を持って仕事をしていた。原子力には特に好きではなかったが、その必要性を感じて取り組んできた。役所の後半では原子力安全規制を担当し、保安院にも在籍していた。事故発生については断腸の思いだ。

事故対応も行っており、今日話を聞いて当時を思い出す場面もあった。今はリタイ

アして自由に話せる立場にあり、今日の場に参加して多くのインスピレーションを受けたことに感謝している。現在も現場で何千人もの方々が働き、中間貯蔵などの課題が解決されていない状況だ。事故は決して忘れられるものではなく、今も取り組まれている課題であると再認識した。

事故の記憶や教訓をどう残していくかについて深く考えさせられた。事故の記憶が薄れていく中で、なぜ防げなかったのかの掘り下げも十分ではないと感じている。遺構を残す意味ではまだやるべきことが多いと感じ、引き続き勉強を続けたいと思う。

菅波:まず、「遺構」を残す目的について考えさせられた。そして、「教訓」が何なのかについても意見が分かれたのが印象的だった。東電は「安全」という教訓を挙げていたが、私は住民として自分の考え方や生き方を見直す機会だと感じた。

特に印象に残ったのは「誰に対して教訓を伝えたいのか」という時間軸の話だ。最近「進撃の巨人」にハマっていて、「2000年後、2万年後の君へ」というテーマが自分の視点を揺さぶった。例えば、廃炉作業がデブリを完全に取り出し、施設を綺麗にするのに100年では済まない可能性がある。100年後の人々に何を伝えたいかを考えると、廃炉作業自体が「遺構的な役割」を果たすと思う。また、1000年後には言葉や文化が変わっているかもしれない。その中で今の教訓がどう活かされるのか疑問に思うこともあった。

高レベル放射性廃棄物の危険な期間が何万年単位で続くことを考えると、処分場自体が「遺構的な機能」を果たす可能性もある。今日「絵文字」の話題が出たのも、この長いスパンで考える視点を持つと興味深かった。偶然、小磯先生と同じテーブルだったので、歴史的な視点でさらに議論できたら面白いと思っている。歴史を踏まえた考え方が新たな視点を提供してくれるのではないかと感じた。

藤川:我々も事故の教訓を伝える必要があると感じており、数年ごとに番組を制作している。しかし、3.11 以外の日に放送すると視聴者が少なく、提案が通らないことが多い。また、新しい情報がないと取り上げづらいという考え方もあり、伝え続けることの難しさを痛感している。

今日、溝上さんと同じ班になり、遺構についての議論をした。溝上さんの「モーメント」の話が特に印象的で、遺構を残すには多くのエネルギーが必要だと感じた。それがなければ、東京電力やその他の関係者を説得するのは難しいだろう。遺構を本当に残す必要があるのか、どう訴えるかが今後の大きな課題だと感じている。このままではすべてが取り壊される可能性が高いと懸念している。地元の人々や周囲の方々には引き続きこの問題について深く考えてほしい。

司会:今日の議論では、事故遺構をどう考えるかがメインテーマだったが、何を残すだけでなく、何を学ぶか、その目的や思いを共有することが重要だと感じた。また、地域の住民や原子力事業者が同じ過ちを繰り返さないためには、その意識を常に持つことが大切だという話があった。これについて真剣に考えていくことが必要だと改めて感じた。

最後に、NHK の藤川さんが言ったように、遺構を残すには相当なエネルギーが必要で、そのエネルギーが社会を動かし、廃炉事業者や東京電力、国を動かしていく必要がある。急ぐよりも、じっくり考え、共に議論を深めながら進めていくことが大切だ。もし本当に多くの人がある思いを持っているなら、長い間寝かせるのは良くない。しっかり話し合いを重ね、この地域塾で重要なテーマとして取り上げて進めていきたい。